つながり若者センター通信
（滋賀県地域養護推進協議会）

第３号　２０２２年８月１日発行

事業が始まり、２年目を迎えました

私たちつながり若者センター（滋賀県地域養護推進協議会）は、児童養護施設や里親など社会的養護を経験した若者や、施設などの経験がなくても様々なしんどさを抱える若者を（つまり、どんな若者でも）応援する事を目的として設立しました。つながり若者センターを、今風に略すと、“つなわか”となるのでしょうか。今年度も、様々な方々の力を借りながら、若者を応援していきたいと思っています。

つながり若者センターは、滋賀県守山市の街中にあります。駅からは徒歩２０分程度なので、若者にも利用してもらいやすくなっています。建物の名称は、マザーボードといいます。１階には相談支援コーディネーターがおり、電話のやりとりや、他機関との会議をするところとなっています。２階はキッチン・冷蔵庫の生活必需品に加えてソファやテレビ、トレーニングマシンもあり、若者がくつろげて、少しホッと一息つける居場所となっています。原則毎月末の土曜日・日曜日には認定ＮＰＯ法人四つ葉のクローバーと共催で「若者食堂」も開催しています。

↑１階の事務局です

↑２階のくつろげる居場所です

＜2021年4月から2022年3月までの相談・支援累計＞

単位（件）

生活相談	就労相談	医療関連支援	法律相談支援	計	個別会議
390	49	3	1	445	67

※相談方法としては、マザーボードへの来所、訪問（アウトリーチ）、通信（電話・LINE）があります。

＜若者食堂参加人数累計＞

単位（人）

若者	その他	計
175	112	287

「若者」と「応援・支援すること」とは

ここで少し、一緒に思いをめぐらせて下さい。「若者」と「応援・支援すること」についてです。

「若者」とは

まず、「若者」とはどういう人たちでしょう?もちろん、当会でも原則18歳以上など、ざっくりと年齢の規定はあります。それ以上に「若者」には様々な〝とらえ〟があると思います。

若者、若い人。力強く、しなやかな心とからだ。経験不足で未熟な人。だからこそ希望や可能性にあふれる存在…誰もが必ず通過した時代。いえ、60代70代80代でも、まだまだ若者!と元気あふれる先輩方もたくさんおられます。

人は成長するために、多くの人との関わりが不可欠です。保護者など親密な大人と愛着を形成し、そこから勇気を出して身の回りの小さな社会に一歩を踏み出す。友達や教師など周りの大人との交流や葛藤の中で、自分のありのままを自分自身で受け止める。そしてより大きな外の世界に羽ばたいていく。

今ではあまり身近では聞かないですが、私が子どもの頃には「婦人会」「子ども会」「青年団」「老人会」など、地域にいろんな集まりがありました。この「青年団」というものを少し調べますと、かつて室町時代以前から「若者組」などと呼ばれ、自然発生的に集落ごとに若者の集まりがあったようです。そこでは、集落の自警や祭礼行事などを担ったり、また気軽に寄り集まって話し合ったり遊興したり、例えば性的な知識もこうした場所で先輩から伝えたりしたそうです。かつての「若者組」は、歴史の流れの中で形を変えて現代にも存続されているようです。

地域のつながりが希薄になったと言われて久しいこの頃ですが、やはり人は、特に若者には、仲の良い友達はもちろん、自分とは違う価値観や属性の人たちとのふれあいがとても大事です。失敗したり傷ついたりしてもいいのです。そうした経験の中で、のびのびと成長していくのだと思います。今は意識してそうした仕掛けを作ることが必要です。

BBQでの若者とスタッフの交流♪

「応援・支援すること」とは

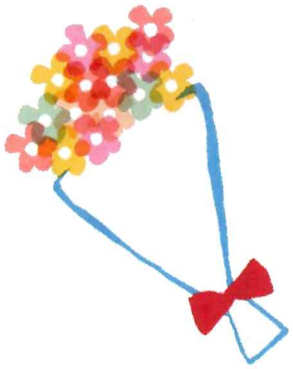
次に「応援・支援すること」について。ひと昔前になりますが、車いすに乗った人に代わり、エレベーターのボタンを押す画像と「ちょボラ」のキャッチコピーをテレビでよく見ました。ちょっとした親切、ちょっとしたボランティアという意味合いだったと思います。今では「ちょいボラ」ともいい、ボランティアを気軽にする、という意味で使われているようです。

ちょっとした親切、人を助けるという行為は、素直にとても気持ちのいいことです。相手のため、という思いが元にはなっていますが、実はまずは自分が気持ちいい。こうしたことを「偽善」と言う人もいますが、そんなことはどうでもいい。人は人とふれあう時に幸せを感じるのだと思います。人はひとりでは生きられないというのは、そういうことかもしれないです。情けは人のためならず、というのも、こんな場面なのでは、などと思ったりもします。

スタッフとして

当協議会のスタッフは児童福祉の専門職ですが、関わる若者の持つ力や繊細さに勇気づけられたり、励まされたり…。若者との相互関係に日々多くの学びを得ています。

つながり若者センター（滋賀県地域養護推進協議会）は、若者の応援・支援をするところですが、それは表面的な見え方です。誰もが経験する「若者」という時代、その真只中にいる若い人たちが、悩んだり迷ったりしながらも、同じように悩んでいる若者に対し、自主的に他の若者のことを応援し、何よりそのことを楽しんでいる姿がたくさん見られます。仕事のことやお金のこと、人間関係のことや生活のこと、マザーボードに集って顔を合わせ、いろんな話をしたり笑いあったり。ただそばに居るだけでも安心する、そんな表情が見えた時に、スタッフの心も癒されます。

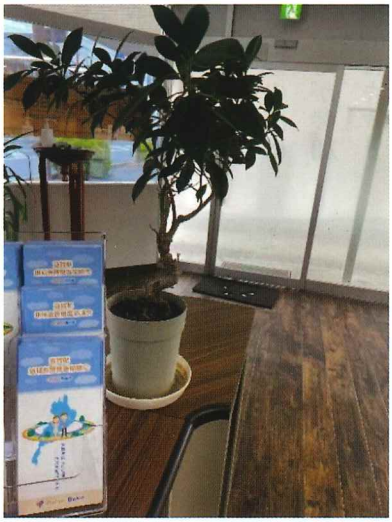


若者たちへ

若者は、未完成で不安定で未来があって、ドキドキとわくわくと、ハラハラとキラキラの、とにかく嵐のような時代を生きる人です。私たちの社会にはこうした、未熟だけれど爆発的なパワーと柔軟な発想がどれだけ重要か！

私たちが関わる若者は、今は少ししんどさを抱えて困難な状況にあるかもしれませんが、これからの長い彼らの人生を充実したものに、そして社会にも大きな役割を果たしてくれることを信じます。

【 局長兼統括コーディネーター　中島　円実 】



1階事務局からの眺めです。
みなさんを待っています♪

どうぞ、
宜しくお願い致します！

連携・協力・尊重し合える仲間を目指して！それぞれのアイコンを決め、ニックネームで呼び合っています！

局長兼統括
コーディネーター
中島　円実

専門
コーディネーター
草場　美里

相談支援
コーディネーター
九鬼　良

相談支援
コーディネーター
松原　由佳

巣立ち応援イベントを開催しました

3月20日に巣立ち応援イベントを開催しました。

イベントのテーマは「コミュニケーションとお金」としました。主に社会的養護出身の若者たちに向けて、対人関係や金銭管理についてのセミナーを実施しました。1日に2回実施をして、若者とその支援者を含めて、昼の部は12名、夜の部は7名の方が参加して下さいました。講師はキャリアコンサルタントのくじはしなおこ先生とファイナンシャルプランナーの橋本晴美先生です。

くじはしなおこ先生

橋本晴美先生

まず昼の部は対面式で、参加者の皆様にマザーボード2階へ集まって頂きました。多くの方から「きれいな所やなぁ」と好評を頂きました。若者たちは空き時間にサンドバッグを叩いてみたり、ソファーで先生方と話をしたり、非常にリラックスしたムードで時間を過ごしていました。セミナーでは、二人の先生から、人の話を聴くことの大切さや、非言語コミュニケーションの重要性、またお金を貯めるために必要なこと、社会保険の制度などのお話をして頂き、若者たちも真剣な表情で耳を傾けていました。

くじはし先生のコミュニケーション講座

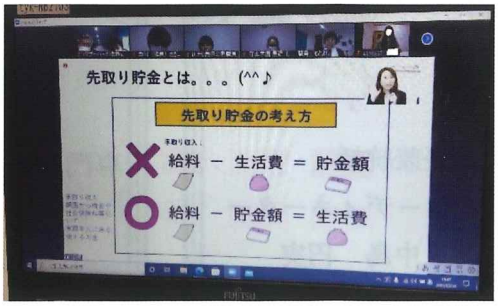
意見交換の場もあり、若者たちは緊張しながらも、自分なりに感じたことや学んだことを言葉で表現していました。多くの若者たちにマザーボードへ相談をしに来てもらえるよう、私たちの普段の活動や若者食堂のこともお知らせをしました。熱心に耳を傾けて下さり、私たちとしても今後より多くの若者とつながり、自分らしく前向きに生活できるように応援していきたいと考えています。

夜の部は18時開始でオンラインでの開催でした。高校3年生の方と、すでに施設を出て生活している方の両方が参加をして下さいました。

熱心に耳を傾ける参加者の皆さん

印象に残ったことは、若者の中にはただ話を聴いているだけでなく、熱心にメモを取ったり、チャットで意見を発表する方がいたりしたことです。多くの困難を抱えている若者たちですが、「学びたい」という思いの強さに胸を打たれました。こういった若者たちのニーズに応えることができて良かったという思いと、今後それをどのように活かしていくかという課題を持ちました。

若者たちを取り巻く環境は依然として厳しい状況にありますが、私たちは若者たち一人ひとりの思いを大事にした支援を実施していきたいと思います。



ズームによる開催（夜の部）

寮　美千子さんに聞く

令和４年２月２５日、作家の寮美千子さん４名が協議会事務局を訪問されました。寮さんは、絵本「おおかみのこがはしってきて」（ロクリン社刊）、「あふれでたのはやさしさだった　奈良少年刑務所　絵本と詩の教室」（西日本出版社刊）や受刑者の詩をまとめた『空が青いから白を選んだのです　奈良少年刑務所詩集』などの著書があります。
その時に、寮さんからお話を伺いました。

奈良少年刑務所で社会性寛容プログラム

２００７年から足かけ１０年、奈良少年刑務所で社会性寛容プログラムをした。受刑者は「犯罪加害者」ではあるが、それ以前に虐待などを受けた「被害者」でもあった。自分で感情を押し殺してしまう人たち。「被害者の気持ちになってみなさい」と反省を促しても、そもそもその気持ちが分からない。
被害者はトラウマになるというが、実は加害者もトラウマになる。
少年刑務所に入った事は、本人にとって「ラッキーだった」とも言える。そこで「はじめて親身になってくれる大人に会った」と言う。そして規則正しい生活。

この子たちはかわる！

彼らの閉ざされた心をどうやって開けられるか？
月に１回、半年間、それで何ができるか？一人で行くのは怖いので夫と行った。
１回目から効果を感じた。絵本『おおかみのこがはしってきて』。アイヌの民話をもとにした絵本で父と息子の会話。これを二人に朗読してもらった。一生懸命読む。読み終わった途端に心からの拍手。人生で拍手をもらったことがない、という子もいる。ここで小さな自己肯定感が生まれるのかもしれない。それまでひどい目にあってきたから。わずか１時間半で様子が変わる。

２回目の授業では『どんぐりたいかい』という絵本。６人で劇を演じてもらった。セリフを関西弁にする子もいて、とても温かい雰囲気になった。
詩を書いてもらう。「書きたいことを書いて」。少年が詩を読んだ。が、声が小さくて下を向いてしまうので聞こえない。「顔をあげてお友だちに聞こえるように読んでね」と言うと、頑張って読んでくれた。みんな大拍手。すると、自分から語ってくれた、「お母さんのことを思い出して詩を書いた」と。
誰かの詩に誰かが「共感する」。好きな色の詩を書いた子はほとんど口をきかない子だった。が、みんなが彼の詩を受け止めると、その日から急に喋れるようになった。
１８期やって変わらない子はいなかった。誰かが受けとめてくれた。彼ら自身の力。「背伸びしすぎる子」には「下を向きたい時もあるよな」と声をかける。弱音をはいてもいいと知ってもらう為に。授業には教官も二人参加するが、「なんでこんなに変わるんやろう」と言っていた。

『指導』したり『教えた』わけではない。

「空が青いから　白をえらんだのです」（新潮文庫、２０２０．５第十二刷。単行本は長崎出版。２０１０．６）に、そうした類のエピソードがたくさん出てくる。
文庫版の「あとがき」で寮さんは次のように書いている。
固い殻をはずすのに、もっとも力になるのが「詩」だ。本人が書いた詩を発表し、互いに合評する事。これに優るものを、わたしは今まで見たことがない。有名な詩人の立派な詩を選ぶよりも、たとえ稚拙でも、自分で書いた詩を自分で朗読し、仲間から拍手をもらい、感想を聞いて、受け止めてもらえた実感を持つこと。それで、それだけで、彼らは変わる。詩を書いた本人も、感想を述べる仲間もみるみる変わっていく。・・・・彼らの中に「自尊意識」が育っていく。そこには確かに「場の力」「座の力」が働いている。「だれもなにか「指導」をしたり、なにかを「教えた」わけではない。教官も講師も、ただ彼らが心から安心できる場所、くつろげる時間を作ろうと努力しただけ。いつも君たちを見つめているよ、君たちの事を大切に思っているよ、なんとか更生してほしい。ただそれだけの気持ちで彼らを一心に見つめているだけなのだ。
寮さんは、「多くの少年院は評価して指導しちゃう。反省文を書かせると反省文がうまくなる」と言う。

寮美千子さんのお話を聞かせてもらって

寮さんのホームページには「旧奈良監獄を高級ホテルに改造しないでください」署名募集中というのがある、この日も、熱く語っていただいた。「人権を守るはずの刑務所をなくしてよいのか？　その歴史を語らず、お金持ちのための施設にしていいのか？」と。
寮さんの話を聞かせて頂き、何しろ寮さんは熱い人だと感じました。話して頂いた、「反省文を書かせると反省文がうまくなる」という言葉が非常に印象に残りました。反省文を書いて、どれだけ反省する事が出来ているか、それが矯正施設では必要な評価になるのかもしれません。しかし、寮先生が言うように、反省文は反省文であり、少年らの気持ちを全て書く事はできないと思います。反省文も勿論大切ですが、反省文ではない、言葉には出来ない気持ちや、思いを誰しも持っていると思いました。
詩を通して寮さんは彼らの心に寄り添ってこられたのだろうと思います。私達も、若者に対して、思いを寄せ、寄り添う中で支援に当たる事が大切だと感じました。若者の居場所となれるよう、寮先生からお聞きした貴重な話を胸に日々若者を見つめていきたいと思います。

寮　美千子さん

マザーボード 若者食堂のごあんない

マザーボードの「若者食堂」

毎月、月末の土日の2日間、若者食堂を開催しています（月末ではない月もあります）。そこには男女問わず、社会的養護を経験した若者は勿論のこと、地域の方々や中学生、スタッフの家族など、あらゆる年代の参加者が集まります。野菜を切ったり、おにぎりを作ったりと、一緒に料理を作ることもあります。地域の子ども食堂みたいです。若者もスタッフや大人も、童心に返り、真剣に包丁を握り、その姿に感動したりまた大笑いしたり・・・。とてもにぎやかです。度々メニューになる餃子、参加者は餃子の皮に、念入りに準備した特性具材を包み込み、ホットプレートで焼いていきます。最初は慣れない手つきで、具がはみ出たり形がへんてこだったりしますが、餃子屋さんより遥かに美味しい！がんばって包んだからこそ美味しく感じます。参加者には、備え付けのマシンでウエイトトレーニングをしたり、サンドバックを蹴ったりパンチしたりする強者もいます。汗をかいて、晴れやかな表情です。

2022年12月 クリスマスの若者食堂

ここマザーボードには、社会的養護等を退所後、懸命に働いている人をはじめ、仕事を探している人、障害を持つ人、性的マイノリティの人、スタッフとして金融の専門家やホスピタルフットボールなどいろんなNPO活動をされる人、太極拳の先生、プロのインクアートの先生、弁護士などなどさまざまな人たちが集まります。

皆が思い思いに、好きなことをして過ごせる居場所。ソファでぼぉっとしてみたり、スマホをいじってみたり。大きなテレビ画面でゲームの対戦をして大笑いしてみたり、スタッフとおしゃべりしたり、相談してみたり…。ここでは、無理せず自分らしくいられるよう、みんなで自然にちょっとずつ配慮しているようにも感じます。

皆さん是非一度、マザーボードの若者食堂を覗いてみませんか。

まずは、ご連絡下さい。直近に開催される若者食堂の内容等をお知らせします。

公式ホームページの、お問い合わせフォーム又はTwitterからもアクセスして下さい。お待ちしています！

食事はもちろん、愛情たっぷりの手作りメニューです♪

野洲川でバーベキューを実施しました♪

編集後記

滋賀県地域養護推進協議会（つながり若者センター）は2年目を迎えました。多くの方々に助けて頂いていることに、感謝の気持ちを忘れず、生きづらさを抱える若者たちが自分らしく前向きに生きていけるように、今後も支援をしていけたらと思います。

地域養護推進協議会事務局（つながり若者センター）
守山市守山６丁目１０－６８　マザーボード内　TEL 077-582-2221
FAX 077-582-2330